子ども学の源流と先駆者たち

―子ども学の先駆者たち　①―

小松　隆二

1　子ども環境の悪化と子ども学の必要性

子ども学が、今関心を集めている。総合的な子ども研究の必要性がかつてなく高まっていると言い換えてもよい。子どもをめぐる諸問題・諸課題が、個別分野・個別領域ごとの学問では対応しきれない状況がますます強まっているからである。

いうまでもなく、教育はじめ、児童心理、児童福祉、少年教護（犯罪・非行）、児童文学、児童文化、小児医学、保育など個別分野ごとには、ますます子ども研究は進展し、成果の蓄積も計り知れないほどである。にもかかわらず、子どもをめぐる環境・状況・実情は全体でみれば必ずしも良好になっているとは言いがたい。

たしかに、明治以降、まず形式的にではあれ、子どもでも階級間に、また武士や商人など同一の階級内でも長男とそれ以外の弟妹たちとの間に歴然と存した差別は次第に克服されるものの、なお実質的には差別は残り続けた。ようやく第二次世界大戦後に至って、新憲法と新しい民主主義の下で、子どもの人間としての平等な処遇が急速に進展する。健康で文化的な最低限度の生活を権利として認められた上で、社会的な諸権利と自由も保障さ

れる近代的な子ども像の実質的な確立もみられるのである。

ところが、近年、グローバル化、高度情報化、モノ本位化（市場原理・競争原理化）が一人一人の人間、また一人一人の子どもを置き忘れる形で異常なスピードで進展をみせた。そういった中で、人々、特に子どもたちの中には、心の孤立化や不安感・不安定感を強め、明るい未来を描けないものが増えてきた。

しかも、好景気・バブルとその崩壊のくり返しで、近年は貧困に落ち込む子どもの増加が国際的にも問題になっている。なかでも、日本における子どもの貧困率の悪化が際立つほどになっている。加えて、くり返す経済不況・恐慌的状況の現出、また進行する少子高齢化にともなう社会的負担増などに直面して、子どもたちに夢や希望が広がらなくなっている。子どもたちは、豊かさ、ゆとり、自由、公平、平和に満ちた暮しを追求し、実現するにも、確かな足がかり、つながり、あるいは一歩一歩踏み出す弾みが得られない状況なのである。しかも、子どもを取り巻くそれらの状況は、将来に向けても良くなるという保障や手がかりが得られない現実でもある。

そんな社会状況の下で、学校におけるいじめや暴力一つ取っても、この二、三年、小学校から高校まで増加傾向に転じ、戦後最高を記録する勢いである。関連する不登校や引きこもりも減少しない。またこの二、三年の児童虐待と児童ポルノ事件の増加・伸びも際立つほどである。

このように、個別領域ごとの子ども研究が長い歴史をもち、大きく進展したにもかかわらず、子どもをめぐる諸問題も、それを包みこむ環境・状況も、全体としては改善されたとはいえない。また体制や社会が悪いからといった観念論や一般論では、もはや前に進めない実情も現実に存在する。体制論や児童一般を抽象的に受け止めるだけではなく、同時に調査・研究でも、また政策・活動でも、一方で総合的・統合的視点、他方で一人一人の子どもにまで眼を向け、心にかける視点、つまり個別性を基礎にしつつも、総合性もはかる視点の必要が一層高まっているのである。

かくして、既存の児童心理学、児童文学など個々の学問の成果や役割は、十分に認めつつも、それを超える総合的な新しい学問や対応の必要も渇望されている。そんな状況の下で、それに向かう挑戦の一つとしても子どもをめぐる諸学科・諸学問の総称・連携学としての子ども学、さらにはもっと踏み込んで総合学としての子ども学が要請され、また挑戦されているのである。

その際、子ども一般とともに、一人一人の子どもにも眼を向ける視点・方法の必要を認識するという意味もこめて、児童学ではなく、子ども学が改めて主張されている。児童という用語は、通常は一人一人の子どもよりも

子ども全体や子ども一般を意味する。それに対して、子どもという用語は子ども一般とともに、同時に一人一人の子どもをも意味する。一人一人の子どもにも光をあて、認識する必要からも、児童を超えて子どもという用語、そして子ども学という用語の使用が意味を持つのである。

もちろん、子ども学の進展にしろ、そう容易なことではない。その点は児童研究・子ども研究における過去の経験がよく教えてくれる。また子ども学が進展すれば、子どもをめぐる状況・環境が直ちに全て良くなるというわけでもない。研究成果が必ずしも迅速に政策や活動に、また環境や状況に活かされるわけではないからである。

また、子ども学のみか、総合学といったものは、大方が統合化・体系化に向かう方法論や理論の開発・開拓を思い通りには進めえず、学としての確立も、社会的ニーズに応えることも、十分にはできずに推移してきたことも、これまでの経験から認めないわけにはいかない。例えば人間学、女性学、老人学、総合政策学、日本学などどれをとっても例外ではない。いずれも興味尽きない学問的挑戦ではあるが、共有財産として共通認識のできる明快な理論、方法、体系を打ち出すには至らず、その領域のテーマ・課題であれば広く受け入れるといった段階を超えられないでいる。それが現実である。

ただ、何事も挑戦が肝要である。子ども学も、たしかに児童研究や児童学として遠い昔からくり返し挑戦されては、しばしば方法論や理論面を中心にした厚い壁を超えられず、学としては思ったほど顕著な成果や発展を見せずに今日まで推移してきている。その点でも、従来のあり方を超える姿勢で子ども学への取り組み・挑戦が必要になっているのである。

いずれにしろ、今後の子ども学の体系化・理論化の前進に向けて、これまで素材や材料がたくさん蓄積されてきたことだけは間違いない。それらを活かしつつ、総合的に子ども研究をすすめ、学として確立させるには、新たな方法的・理論的挑戦、またさらなる実証的研究への積極的な取り組みが欠かせない。

具体的には、子ども研究では、個別領域の枠を超える協力・連携、さらには総合学への挑戦・踏み出しが是非とも必要である。総合学の確立は、理論、方法、体系の共通認識の形成・確立の可能性からみて、すぐには無理であるとしても、それに到達するまでの一つのプロセスとして多様な研究領域の総称や連携を目ざすことも意味があろう。ただ、総称や連携にしても、理念や哲学、また目的や課題は議論し、明らかにする必要がある。たえざる創造への挑戦、新しい道の開拓は、学問の宿命であるというだけではなく、くり返しになるが、それを必要とするほど子どもをめぐる環境・状況が危機にさらされているという現実も忘れてはならないであろう。

2　個別研究から総合学へ

子ども学への取り組み・挑戦は、意外に長い歴史をもっている。子ども学を構成する個別分野になれば、奈良、平安時代に問題の発生やそれに対する取り組み・研究の淵源を求めることもできよう。子ども学の源流はいうまでもなく総合的な児童研究、あるいは児童学である。現在に続く始点をどこに求めるかにも、多様な見方が存在してよい。後で詳しく見るように、少なくとも明治中期には、学を志して意識的に挑戦するという意味ではその源流ないしはその端緒がうかがえる。

総合学としての児童学や児童研究が呱々の声をあげるのが明治中期であるとすると、他の社会諸科学の生成にそれほど遅れをとらない出発である。それは、医学、教育、心理、福祉、非行をはじめ、多くの分野・領域において、未成熟で成長途上にある子どもが他の階層・集団よりも重視されることが常であった事情を反映するものといってよい。ただし、児童学、ついで子ども学は、その後もくり返し取り組まれてきたにもかかわらず、学としての確立は依然として今後の課題のままである。

もっとも、戦前でも、明治中期における児童学の誕生の後、大正・昭和に進むにつれて、児童学・子ども学にさらに進み出す機会や盛り上がる機会が全くなかったわけではない。しかし、そのいずれの場合も、総合的な児童学・子ども学へ展開する流れにはつながらなかった。例えば、一九二八（昭和三）年、日本両親再教育協会（松本亦太郎会長）の編集で刊行された『子供研究講座』（先進社）における子ども研究者の結集もその一つであった。

同講座には、倉橋惣三、田中寛一、松村武雄、小原国芳、久留島武彦、三田谷啓、千葉亀雄、新渡戸稲造、安部磯雄ら錚々たる執筆陣が集まった。ただ講座の編集や新平や松本亦太郎など協会の役員・指導者にも、また執筆陣にも児童学・子ども学を展望する視点は欠如していた。それぞれの専門や領域から子供の成育、保育、教育、文化、権利などについてバラバラに成果を寄せるだけに終わっている。しいて挙げれば、日本両親再教育協会主幹の上村哲弥ら少数が子ども研究に言及する程度であった。

ということは、この段階でも、一般的には連携学あるいは総合学としての児童学・子ども学の必要性の認識は欠け、総合学へ踏み出す機は熟していなかったということである。ただ、広範な領域の多様な問題にわたる子どもに関する研究を一堂に集める「講座」の必要・意義は認識していたわけで、その成果は、その後の子ども学への取り組みに対する資料・素材の提供の役割を果たすこ

とにはなっていた。

もっとも、そのような総合学の遅れといった事情が、むしろ個別分野の応用学としての子ども研究への分断・細分化と分野ごとの発展を一層促すことにはなった。子どもをめぐる問題には喫緊・緊要のものが少なくなく、それに迅速に応えるには成果が目に見えてはあがりにくい総合学ではなく、教育学、心理学、医学、福祉学、文学など個別分野における既存の学問や体系の応用による具体的な成果に基づく問題の解決・対応が優先されたのであった。

実際に、教育、健康・医療、慈善事業や社会事業時代以来の社会福祉、社会政策など労働問題、心理学、あるいは文学、文化・芸術でも、子どもをめぐる問題は、殊更早くから重視されてきた。それだけに総合学以前に、先行する個々の研究・対応が優先され、それに集中、あるいは依存せざるをえなかった。教育学はじめ、児童心理学、小児学・産婦人科学、保育学、児童福祉論、少年教護論、児童文学・童話学、童謡論、児童文化論などの個別分野における展開がそれである。

そのような個別専門学の応用としての児童研究は、心理学、医学、文学を先頭に量・質ともに膨大なものがある。しかし、それらの各個別領域を超える交流・連携は、決して継続的に展開されたわけでも、量的にも質的にも目だったわけでもなかった。そこに子どもをめぐる全体状況が的確に把握できなかった一因もあった。また子ども研究にあっても、総合的・体系的理解を支え、促す方法論や理論の展開・確立ができないまま今日に至った一因もあったのである。

このあたりで、もちろん既存の個別領域における研究もさらに深めつつ、同時に個別分野・領域を超える協力・連携を第一段階の踏み出し・プロセスとしつつも、たんなる一時的・散発的協力・連携で終わらせるのではなく、子ども研究全体を総称したり、連携したりする意味での連携学の強化・恒常化を目ざす子ども学への積極的取り組みがなされてよい。まずは従来の延長で多様な学問に拠る応用学としてアプローチすることになるが、その際、そこに閉じこもることなく、その枠を超える視野・視界を持つこと、それによって多様な学問のたんなる並立や総称を超えて、連携を模索することが必要である。それによって、子ども学の第一段階の成立が見られることになるのである。

その上で、次の段階として総称、さらには連携をも超えて一つの学として統合・体系化さえ試みる総合学としての子ども学が本格的に挑戦されることになろう。白梅学園大学子ども学部および大学院子ども学研究科の開設は、そのような課題や役割も背負っているのである。

3　子ども学の源流
―児童学の出発と最初の宣言―

（1）『児童研究』への道

日本において子ども学はいつ頃から始まったのであろうか。多様な視点・意見があってよいし、議論の末、いずれ一つに落ち着くのもよい。私自身は、子ども学の先駆・源流は、多くの人がそうであるように児童学であると理解している。その児童学の源流に関しては、すでに触れかけているように、一八九八（明治三一）年という世紀の転換直前の東京教育研究所による著名な『児童研究』の旗揚げに求めてよいと考えている。

その旗揚げこそ、一方で児童をめぐる個別分野における研究の先行と展開、他方でそれらを追い、包摂する児童学のような総合的な研究の展開という二つの流れが明快に意識された上で、科学としての児童学が提唱、挑戦された最初の動きであった。

子どもに対する関心そのものは、それ以前から盛り上がりつつあった。例えば、子どもをめぐる雑誌をみても、それ以前からかなり刊行されている。少年少女雑誌、学習雑誌、あるいは文学中心の雑誌が多いが、『小学雑誌』（修正社、一八八二年創刊）、『小学之友』（学友館、一八八八年創刊）、『少年園』（少年園、一八八八年創刊）、『日本之少年』（博文館、一八八九年創刊）、『こども』（少年園、一八九〇年創刊）、『小国民』（学齢館、一八八九年）、『小学生徒之友』（学友会、一八九〇年創刊）、『文明之児童』（薇州文社、一八九一年創刊）、『少年史海』（益友社、一八九四年創刊）、それに既存の『日本之少年』『幼年雑誌』などを一本化して一八九五年の新年早々から再出発した『少年世界』（博文館、一八九五年創刊）といった雑誌が比較的よく知られている。

なお、そのうち『日本之少年』は、一八九〇年に同誌「号外」として『少年学術共進会』誌を刊行する。その『少年学術共進会』誌は、当初隔月で刊行されるが、翌一八九一年からは月刊をめざし、かつ「日本之少年号外」の看板を取り外して、『日本之少年』とは独立した機関誌となる。

ちなみに、その『少年学術共進会』誌には、『嗚呼祖国』『農民の福音』等でよく知られる巌穴こと赤羽一が郷里の信州で過ごしていた少年時代に頻繁に投稿し、採録されている。また同誌は、『小学之友』『日本之少年』などと共に、須永金三郎が編集にあたった。須永は、栃木県足利の出身で、足尾鉱毒事件の反公害運動に深く関わった人である。彼は、東京専門学校（後の早稲田大学）を卒業して間もない頃、博文館に勤務、編集次長まで勤め、主に児童雑誌や児童書の出版・編集を担当した。

須永は一八九四年にいったん博文館を退社し、右文社に拠りつつ、独自に児童ものの出版を手がける。翌一八九五年に、帰郷し、以後終生の事業となる新聞・著作の仕事を、郷里の足利で取り組むことになる。その最初の仕事が両毛新報の発行であった。丁度その直後から、渡良瀬川沿岸における田中正造らによる反公害運動が本格化するが、それにあわせて、須永も足尾鉱毒事件に深く関わることになる（須永の経歴については『栃木県歴史人物事典』〔下野新聞社、一九九五年〕を参照）。

須永の後を受けて博文館に入社するのが巌谷小波（季雄）であった。彼は、同社で『少年世界』などの主筆として活躍し、一層名声を博することになる。なお須永の後の『少年学術共進会』誌の編集は、柳井緑太郎が引き継ぐことになった。

以上の子ども向けの雑誌とは異なって、日清戦争後の社会・経済動向の変化、そこにおける子どもの重要性を受け止めて、多様な児童研究者が結集し、子ども研究に新たな道を拓こうとしたのが『児童研究』であった。その研究対象は、専ら子ども、それもその心身にわたる全体像を多様な立場から研究するというものであった。それに応じて、読者対象は一般市民や子どもではなく、研究者や専門家であった。そういった性格の児童関連誌としては、『児童研究』が最初の雑誌・機関誌であった。

東京教育研究所による『児童研究』の創刊は、一八九八年一一月三日であった。わざわざ天長節の一一月三日としたのは、偶然ではなく、当時の人たちにとっては新たな船出をする決意や使命感を受けとめた重い意味があった。編輯兼発行者は山下仲次郎。発行所は奥付に当たる裏表紙には「教育研究所」とあるが、表紙には「東京教育研究所発行」とされている。ただし、第三号（一八九九年一月）からは表紙も「教育研究所発行」に変わる。編集兼発行者には変更はない。主要な担い手は高島平三郎、塚原政次、松本孝次郎らであった。多くの領域の研究者が参加するものの、その主力はやはり心理学者であり、アメリカの児童学の影響を受けたものたちであった。

ここで重要なことは、すでに周知のことであろうが、『児童研究』が早くも創刊時から「児童学」という用語そのものも使用していたことである。しかも、児童心理学を中心にした個別分野の研究の進展と、それに比べて遅れていた総合学としての子ども研究（児童学）の当時の位置と必要性も認識していた。そのうえで総合性と科学性のある体系的な児童研究、つまり児童学を同誌の課題としたのであった。

（2）最初の児童学の宣言

『児童研究』創刊号を実際に手にとってみると、「児童学」の用語は二箇所で使用されている。そのうち、今日

の子ども学につながる意味で使用されたのは、巻頭の「発刊の辞」においてであった。その直後から、児童学の名称が著書・著作などでしばしば見られるようになるのは、周知の通りである。また少年・少女物など子ども向けの雑誌が多数刊行されるのも、『児童研究』の創刊から間もなくであった。

時代の先を行った『児童研究』の意気込みや姿勢は、この「発刊の辞」によくうかがえる。その「発刊の辞」は、「単に心理学の名に満足せずして児童学の新名称を附与し児童の心身全体に関する研究を創むるに至れり」と同誌の位置・役割を明確に打ち出す。すなわち、一方で児童をめぐる研究では応用学が先行、とくに自分たちが主として関わる児童心理学がその先頭に立っていることを認識しつつも、同時に「児童の心身全体に関する研究」を目ざす総合学としての児童研究の意味や役割も認識し、児童学を打ち上げることによって、新しい方向・役割を模索していたのである。

かくも明快に、個別領域における応用学としての児童研究の進展という状況、同時にそれを超える総合学としての児童研究・児童学の必要な状況を意識していたのは、この段階では極めて異例である。

先の引用に続けて、「発刊の辞」は、「一対象物に就き斯の如く各科の学者が熱心に研究したるものは古来其類多からざるべし」と、児童問題については多くの領域の研究者が対応してきた現実を認めつつ、その限界も認めている。まさに今日の子ども学の成立につながる視点である。

この段階の児童学の呼称が、研究者の集まる研究所の機関誌、それも創刊号の「発刊の辞」で使用されていることは、極めて重要である。たんなる個人的思いつきを超えているからである。その点で、この「発刊の辞」こそ、日本における「児童学の最初の宣言」といって差し支えないものである。この宣言で見るかぎり、子どもをめぐる諸科学の応用的研究やアプローチのたんなる総称としてではなく、諸科学の総合化・体系化への挑戦が視界にあったことがうかがえる。この点で、同誌第五号（一八九九年三月）で「米国に於ける児童研究」を紹介した山口三之助がアメリカの動向として「総合的研究を開くに注意せり」（一八頁）と総合的研究の流れを確認していることも想起されるであろう。

ただし、学としての児童学が『児童研究』への参加者全員に共通に目標や課題として受けとめられていたとはいえない。多くは、総合的な児童研究の必要性を認めつつも、自らの研究・執筆ではなお個別分野の関心にとどまるものが多く、児童研究の総合化では曖昧な認識・アプローチを引き続き、維持することになった。せいぜいそれら個別分野の総称としての児童学への関心と関わりであった。現実には、総合的な児童学に関する共通認識

は一部のものに限られ、その全般的な進展や定着にはまだ大きな距離があったのである。

それでも、自分の属する学問以外の方法や課題に注意を向けたり、関心を示そうとしたりする姿勢は形づくられていく。実際に、同誌は、外国における児童研究動向の紹介を含め、児童心理、幼児保育、医学、文学、職業、学校管理など多様な面・領域からの児童に関する研究・成果を引き出しつつ、その後、児童研究の中心として長く活動を維持することになる。

なお『児童研究』創刊号には、前述の通りもう一箇所に児童学の用語が使用されている。それは、無署名の「精神研究の分類」という小論の中に〈paidology〉の訳として使用されたものである。児童学は、paidologyの訳語としては適切なものであったが、必ずしも日本における研究動向を踏まえた上で総合的な児童研究を理解し、その必要を訴えて使用されたものとはいえない。もっとも、この訳語の的確さからも、『児童研究』の関係者たちが先行していたアメリカにおける児童学に関心を向けていたことは十分に推測できるであろう。

かくして出発した『児童研究』であったが、当初は科学的・研究的な硬い視点から主に研究者の手で研究者向けに刊行された。比較的早い時期から「母親のため」といった欄をもうけ、子育てなどへのアドバイス・啓蒙的記事類も載せるが、全体として見れば必ずしも母親などが近づきやすい編集・内容ではなかった。

それでも、『児童研究』は研究者の間には受け入れられて行き、その隆盛を足場に、一九〇二年一二月には同誌およびその発行所であった教育研究所の関係者によって、やがて学会（日本児童学会）に発展していく「日本児童研究会」が創設される（一八九〇年以降の日本の教育研究会、児童研究組合などの創設については、高島平三郎「我が国における児童研究の発達」〔『児童研究』第二号、一八九八年一二月〕に詳しい）。また『児童研究』も次第に創設時よりは柔軟な編集に変わっていく。

もっとも、一般市民も読者・関係者の輪の中に巻き込むように、子どもの総合的調査・研究が啓蒙的役割も付与されて展開されるのは、大正、さらに昭和に入ってからである。巌谷小波、三田谷啓、高島平三郎、倉橋惣三、沢柳政太郎らが活躍する大正期の一九一七年創刊の『児童』（児童教養研究所）、関寛之、尾高豊作、三田谷啓、倉橋惣三、霜田静志、坪田譲治、久留島武彦、河崎なつ、波多野完治らが活躍する昭和期の一九三四年創刊の『児童』（郷土教育連盟・日本児童社会学会、刀江書院）などの発刊に至ってからである。

その頃から、児童研究は各地で展開されることも特徴の一つになっていく。しかも、継続的に広く、深く掘り下げられていく。例えば、愛知県では、大正末になるが（一九二五年）、児童研究所が創設されて機関誌『愛知県

児童研究所紀要』に成果を発表しつづけるし、また大阪では、帝塚山学院が学生をも巻き込みながら、児童生活研究会の機関誌『児童生活』に成果を発表するなど、長期にわたって児童研究を維持したのがその代表であった。

(3)『児童研究』・「児童学」誕生の背景

以上のように、子ども学に先行する児童学の源流と言うからには、萌芽としてであれ、総合性と科学性の認識のともなった視点に基づく研究や取り組みの形をなしていなくてはならない。たんに広範囲にわたるだけで、曖昧な認識や取り組みでは記念すべき源流や出発点とはいえない。

『児童研究』は、それに十分に応えるものであった。もちろん総合性といい、科学性といい、すぐに成果がでるものではないが、少なくとも総合性のある科学としての児童学の必要性を認識し、目標としてであれ、それを提唱し、実践に踏み出したことは間違いない。たとえ参加者全員がそのような意識・自覚をもっていたとは言えないにしても、「発刊の辞」で児童学を訴えた意味は大きい。

そのように、他の付随や偶然ではなく、児童学そのものを明確に意識していたことが、同誌、そしてその「刊行の辞」を日本における児童学の最初の宣言・出発と位置づけうる理由でもある。まだ総合学としての体系、方法、理論などの構築はこれからであったが、個別学の応用を超える連携学なり総合学なりを意識していた点で、傑出していた。今日にも生き続ける方向性であり、それが今から一一〇年も前に認識され、訴えられていたことは、十分に評価されてよい。

一一〇年前の世紀の転換期といえば、日清戦争後の資本主義経済の躍進にともない、労働問題、足尾鉱毒事件のような公害問題、また貧困問題などの社会問題も急増していた。子どもをめぐっても、新しい動きがいくつも胎動していた。

一つには、初期資本主義下に過酷な労働を負わされる子どもたち、生活のために労働に追われる両親が家庭にいない日中、路上で勝手に遊ぶ貧しい家庭やスラムの子どもたち、小学校にも通えない子どもの就学問題など子どもたちをめぐる社会問題が拡大していた。

二つには、それと同時に、先駆した石井十次、石井亮一・筆子らに続いて、留岡幸助、野口幽香らによる子どもの保護をめぐる集団的・組織的活動も目立つようになっていた。新しい時代の到来と共に拡大する子どもをめぐる問題の解決・緩和のために、個人的善意・慈善を超えて、主に要保護児童に対してではあるが、子どもの保護を訴えたり、組織的保護の実践に乗り出したりする動きが少しずつ表面化、さらに拡大していたのである。

三つには、この時期は、民法が成立、施行され、子ど

もの保護を含む非営利活動を目的とする組織（法人）を公益法人として始めて法認したり、同時に子どもを含む家族のあり方なども規定・規制したりする政策の整備期でもあった。

さらに四つには、児童文学や児童文化をめぐる活動も拡大しつつあったように、子どもをめぐる状況は貧困などマイナス面の展開のみでなく、子どものための教育、文化・芸術、文学などではより高く、またより深いものを求めるプラス面の向上ニーズも拡大・高まりを見せる時期でもあった。それに応えるのが、『少年倶楽部』（北隆館）始め、明治三〇年代にあいつぐ児童物といえる雑誌・著作の刊行であった。

なお『児童研究』創刊号には、巻頭論説として無署名ではあるが、「児童研究の必要」が発表されている。そこでは、児童研究が新しい分野として起こったのは、国際的には一九世紀末であること、教育、保育、学校経営などに関しては児童にとってはどのようなあり方が最も相応しいのかを科学的に明らかにする必要が出ていること、とくに「児童研究そのものの理論的及び実際的の必要を詳かにする」（前掲「児童研究の必要」『児童研究』創刊号、三頁）必要のある段階であることを強調している。

そんなさ中の『児童研究』の出発であった。児童の総合的研究という子どもをめぐる新たな対応の必要に応えて、先陣をきる挑戦であった。学としての児童学の認識といい、産業革命下における子どもをめぐる経済・社会情勢に対する認識やタイミングといい、絶妙の創刊であった。

4　上澤謙二のこと

子ども学の歴史については、すでに大泉溥、野上暁氏らの精力的な研究業績がある。とくに基本となる文献史的な足跡・業績については大泉氏の業績、また第二次世界大戦後の佐野美津男の子ども学の提唱に始まる動向については、野上氏の近著（『子ども学　その源流へ』大月書店、二〇〇八年）に詳しい。子ども学のその後の歴史的展開については、そのような研究に譲り、ここではこれ以上触れないで、その研究のさらなる発展への素材提供として、先駆的人物を紹介することにしたい。人物を通して子ども学の足跡の一端を辿ってみようということである。

子ども学の先駆者といっても、子ども学の考え方・見方にもよるが、極めて多様・多彩である。高島平三郎、元良勇次郎、関寛之などは誰でもすぐに想いうかべる人物であるが、その他、松本孝次郎、巌谷小波（季雄）、留岡幸助、倉橋惣三、尾高豊作、三田谷啓、豊田芙雄子、高田慎吾、松村武雄、蘆谷蘆村（重常）、大槻憲二、霜田静志、乙竹岩造、小原国芳、久留島武彦、滑川道夫、国

分一太郎、塚原健二郎、佐野美津男など限りがない。よく知られたこれらの先人たちも、子ども学の眼で見直すとまた違った味わいや評価がでてくるものである。

それらの先駆者から、個別分野・領域ではよく知られていても、子ども学の流れではそれほど知られていない人物も含め、順不同で取りあげていきたい。まず最初に上澤謙二（うえさわ　けんじ）を紹介することにしたい。

上澤に関しては、従来は、戦時下における戦争協力的作品などに光をあてるものを含め、児童文学者の側面に眼を向けるのがほとんどであった。ところが、上澤は、児童文学者としては例外的に児童学や童話学といった用語を自らも使うなど、児童文学者一般を超える視野ももっていた。彼のその側面はまだ十分には顧みられていない。その点が上澤を最初に取りあげる理由でもある。

上澤謙二（一八九〇―一九七八）は、創作・評論活動を中心とする児童文学者としてよく知られている。同時に彼は、保育や保育学にも関わっているし、キリスト者として幼稚園や日曜学校の経営・運営・運動にも関わっている。また子どもに関する雑誌の編集も手がけている。

このように、上澤は保育や童話を中心に子どもの問題に広く関わったが、総合的な子ども学に対しては必ずしも積極的に寄与したというほどではない。ただ、次回に詳しくみるように、彼自身が児童学という用語を使用していたように、その後の子ども学が、おぼろげにであれ、彼の意識や視界の中にあったことはまちがいない。その点だけでも、子ども学の流れや体系化への努力と貢献では無関係とはいえない。また、童話学という用語も使っているように、童話・お話の口演・実演とあわせ、理論的・科学的側面からの解明・位置づけにも尽力している。

これらの側面は、従来ほとんど注意を向けられなかったが、その視点や姿勢のみでも、子ども学の歴史、またそれとのつながりにおける上澤の関与や役割は看過できないものがある。その面では、他の児童文学者と比べて上澤が先行しており、独特の位置にいたことがうかがえるであろう。

いずれにしろ、上澤は、子どもをめぐって文学作品の創作や評論、さらに保育・子育てへのその応用・実践活動などを幼稚園や日曜学校の活動・事業を通して広く展開した。とくに留意されてよいのは、児童文学なら児童文学でも、作家として作品を書いたり、評論をしたりするだけではなく、子どもの成育・成長に対する児童文学の意味、効果、役割などを科学の眼で見ようとする教育者、研究者、さらにはその実践家としても関わったことである。

その際、既成の理解やあり方を超える新しい考え方、また挑戦・実践もくり返し見せた。前述の童話・物語・お話の理論的整理、科学的解明とその応用・活用への努力もその一つであった。

このように、童話・お話への科学的アプローチを含め、いたるところで既成のあり方を超えようとしたところに、子ども学への芽を児童文学、とくに童話学の側面から育てようとした上澤の役割を評価できるし、またそのような挑戦に彼の真骨頂もみられるのである。その点で、彼はこれまで適切に評価されてこなかった面を持っている人でもある。

（以下、次号に続く。参考文献類は次号に一括掲載）

表紙によせて

白梅学園大学　准教授　**杉山 貴洋**

「地域と子ども学」創刊号の表紙は、東村山の子育て支援の特集をうけて、ころころの森プレイルームの写真を掲載しました。ころころの森は、本学が運営委託を受け、空間デザインを私が担当しています。プレイルームにあるシンボルツリーをはじめ、どんぐりのロゴマーク、８つの部屋のマークなどのデザインをしました。

ころころの森は「みんなでつくるセンター」として、市民やNPO、大学など様々な人の関わりでつくる子育て総合支援センターです。そのため、柔らかく親しみやすいデザインを心掛け、様々な人の関わりが、空間にいかされるような試みをしています。例えば、シンボルツリーには、季節に合わせてワークショップで作られた子どもたちのモビールが飾られます。子どもたちのアートセンスが、ころころの森の空間を彩っているのです。何気ないプレイルームのスナップ写真のなかにも、地域の関わりがあることを感じて頂ければと思います。